横越 沢海 木津 小杉

分館で敬老会開催

七〇才以上は六八〇名（内 男二九〇名）

横越・高橋分館長のあいさつ

明治から三代の波乱と激動の世代を生き、今や飛躍的な発展をとげ、今日の繁栄の基礎をなしたのは、多くの高令者の血と汗の努力によるもので、このご苦労に感謝と、長寿を祝福して恒例の〝敬老の日〟村内五会場で70才からの高令者六八〇名を招待し、敬老会が催された。

横越分館では、この日91才の市村イツさんと佐藤由太郎、伊島宮三郎、長谷部幸吉、阿部イキ、永井ヒョさん等90才以上の長寿者を始め、二二二名を招待し、横越中学校を会場に開催した。

県知事から贈られた記念品を列席の長瀬収入役から伝達された長谷部幸吉さん、「有難いことです」と感謝して居られた。

この他神田恒吉さん等5組の金婚夫婦へ村社会福祉協議会からの記念品などの贈呈と、来賓の祝辞等があり、祝宴に移り各部落の婦人連の接待民踊などで楽しい一日を過された。

今年の敬老会は、このほか沢海、木津、二本木、小杉においても同じように開催された。

今回は横越分館主催のようすを主に載せましたが、各地域では特に婦人会の人が、接待から民踊まで披露し、秋のいそがしい日をかえりみないで頑張ってくれました。

尚今年の高令者は、七十才以上の男は二九〇名、女は三九〇名です。又村内の一番高令者は佐藤丸吉さん（木津上）、女は板垣コウさん（沢海中）で、共に明治十五年生の九十六才です。

上手な酌（婦人会）で話もはずむ

「少年教室」合宿で

公民館で二泊三日の学習

地域の、少年リーダーを育てたい、ということで今年も少年教室を開催しています。

夏にキャンプ生活を送り、自然の中で生活する厳しさを体験してきたものです。

今年はいろ〳〵の事業からキャンプができず、公民館で合宿をやることにしました。

子供と話合いの中から、平日の夕方四時頃公民館に集り朝ごはん食べて公民館から歩いて小学校へ通い、そして夕方から就寝までの短い時間を上手につかってみようということで、去る九月十三日、十四日二泊三日の合宿を行いました。

これは、子ども達の発想をもとにして、実施したものです。

土曜日になると塾へ通ったり、スポーツ少年団の練習があったりしてなか〳〵集まれない。そこで平日でどうか、ということになったのです。

第一日目、午後五時からオリエンテーション、夕食作りです。夕食はカレー、ドンブリで三杯も食べる子供もいてビックリしました。

夕食後は学校の宿題を一時間、その後、映画、九時から自由時間と入浴十時就寝。

二日目は八時までは前日と同じ日程、八時からキャンドルサービスとゲーム、子供達の反応は早い、ゲームでとてもにぎやか。

十時になってもなか〳〵寝れず、でも翌日が休みなので今夜はゆっくりしていたいのだろうか。

十五日、朝六時起床 寝具のあとかたづけをやり〝朝の集い〟ラジオ体操、朝食後は映画を見た感想文を書いてもらった。

不充分な合宿であったが、子供達には楽しい合宿のようであった。次に子供達の感想をひとこと。

はるばる五頭のふもとから火の神がきてくれた。希望の火、勇気の火、友情の火、感謝の火がよかった。ゲームが特に面白かった。最後に、このキャンドルファイヤーで火のありがたさこわさを知った。

（六年、清野朋広）

読書感想文

男の生き方（尾崎秀実[ほづみ]著）を読んで

木津　山田正三

人生とは「邂逅と離別」の繰返しの歴史であると思っている。その邂逅が人でなく、本との出逢いも、との齢を重ねるまでには、かなり多かった。

然し乍ら心から感動を覚えるような本には、滅多に出逢わない。福沢諭吉は「蘭学事始」を繙[ひもと]く度に、著者の苦心を偲んで涙を流したというから、私の心には本から受ける感激性が失なわれているのかも知れないと思う。

昭和二十五年頃であった上司である横越中学校長和泉沢長治先生より「山田さん、この本を読んでみなさい。人生観を根本から揺すぶられるような本ですよ」と申され二冊の文庫本を貸してくだされた。尾崎秀実[ほづみ]著「愛情は降る星の如く」の上下巻であった。

あまりにも有名な本であるから、読まれた方も多いことと思う

ゾルゲ事件に連座し、昭和十九年十一月七日、売国奴のスパイとして絞首台の露と消えた尾崎秀実が、妻の英子さんと、当時女学生であった娘の楊子さんに、獄中より送った二百数十通に及ぶ書簡集である。

スパイの容疑者として酷しい検閲の制約下に書かれた書簡集であるとはいい、人間尾崎秀実の世界観、人生観、人柄が余すところなく忠実に浮き彫りにされている。

朝日新聞の記者として、また近衛内閣の嘱託顧問として日本屈指の中国通の該博なる識見は遺憾なく発揮された。

英語はもとより、中国語、ロシア語、ドイツ語、フランス話、イタリア語にも通じた語学の大天才である。

昭和十六年より十九年までの満三ヶ年の恵まれない獄中生活に尾崎氏の、一刻も無為に過さない勉強ぶりは、妻の英子さんよりの差入れの本の書名によっても容易に察することができる。然も死の極刑は、尾崎氏自身充分予想していたのである。

スパイどころか尾崎氏は、戦争の悲惨さを、一刻も早く終了させようとして、生命をも顧ず、主義に殉じた愛国者であったと言う識者も多い。

自巳の信ずる主義のためには、死刑を目前として微動だとしなかった大丈夫の心意気!!反面、妻や娘等肉親に対する切々たる愛情の細やかさは、これが死の極刑に少しの取乱しもなかった男かと疑さえ抱く。文芸評論家として現在縦横無尽の活躍をしている異母弟尾崎秀樹氏は、「兄秀実には心から愛された」述懐している。

人間とは、男とはこのようにこそ生くべきであろう

私たちの読書サークル「あすなろ」のテキストにもこの本を二回にわたって取上げた。私も改めて購入し三年に一回位の割で五回程読んだ。その間十人に近い友人、知巳にもこの本を読むことを勧めた結果、装幀紙質共に粗悪なこの文庫本は、手垢と磨り切れで、文字通りの満身創痍、私には換けがいない、いとしい本となった。

中国を訪問して ②

子どもたちが熱烈に歓迎

横越（川）佐久間久子

北京から夜行に乗り次の目的地沈陽に向った。

沈陽ではトラクター工場、漢方医学院を訪問し、トラクター工場では、ハンドトラクターの製作課程と試運転の様子を見せてもらい試運転の時こちらから二、三人の人が少しずつ実際に運転するのを見学し、普通トラクターより小まわりのきくのに感心しました。

また、この工場には、中学生が一年に一ヵ月、学校の実習で働きに来ることを聞きました。これは労働の大切さを身につけさせるということでした。中学卒業後、自動的にこの工場へ働きに来るのかという問いに、農村へ行き再教育を受け、終了すると、農村工場、学校と、それぞれの道にわかれるということでした。

私達は、中学までは義務教育で、労働の強制はなく、勉強だけですが、それに比べ、中国では労働の大切さを身につけるために働くことが義務づけられていることを知り、教育の一環として労働があるのはやはり、ある程度の強制ではないかと思います。

次の目的地ハルビンでは、午前中船で松花江の視察と電気機械工場の訪問、午後は児童公園へ行き、子供達から熱烈の歓迎を受け、公園内には全長二粁の鉄道があり、運転士、車掌、切符切りとすべて子供達だけで運営している汽車に乗せてもらいました。

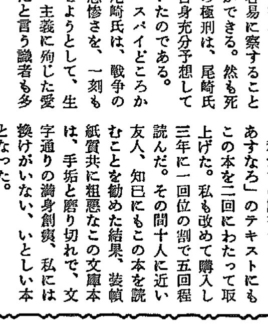
子供達との直接の触れ合いはこれが最初でしたが、ものおじせずしっかりしている印象を受けましたが、しっかりしているというより、恥かしがることを知らず、何か説明する時でも、胸をはってはきはきと答える様子を見て小さい時からの教育がいかに徹底しているかが伺われました。

それに、子供達が「毛主席をたたえる歌」を歌っているのを、訪問中、何度も聞き、毛主席の偉大さを私達に訴えているように感じ、圧倒されそうでした。中国の人達は、自分の意見を持つことができないように感じます。

そんな時「自由」は大切だし、必要なことだと思いました。

ハルピンの児童公園

こどもサロン



夏休み後の競書大会に出品するために、前から練習していたものである。

三年生としては、筆の入れ方、払い、はね、止めなどの基本がきちんとできていて、うま過ぎるほどの出来ばえである。

誠君は、とくに書き方の時間は、張り切っており、真剣に筆を運んでいる。

土曜日の習字塾も楽しみにしている。

（横小三年　市村　誠）

第十二回俳句作品公募句題

秋の宵
（秋の夜半、夜半の秋、宵の秋、秋の夜）

草紅葉[くさもみじ]
（草の色、草の錦）

初鮭[はつざけ]
（鮭網、鮭小舎、秋味、筋子）

三題通じて六句

〆切　十月末日

横越村公民館

大江山横越親善俳句大会のごあんない

日時　十一月十三日 午前九時
会場　木津分館（旧木津小）
兼題　末枯、山粧う、蟷螂 五句一組
席題　当日発表（総互選）
選者　原一笑、武藤信也 丸山虚秋、増田岳柳
賞　二十位まで
入花料　五百円、終了後懇親会、参加者は外に五百円
〆切　十月二十五日必着
投稿所　横越村公民館 俳句係